

國學院大學學術情報リポジトリ

司馬相如「長門賦」小考

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 崇義 メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000219

司馬相如「長門賦」小考

鈴木 崇 義

一、はじめに

「買賦」という言葉がある。李白「白頭吟」に見える言葉で、金銭をもって文章を買い、それにより自分の思うとおりにことを進めることを示す⁽¹⁾。出典となる話柄は、司馬相如「長門賦」の序文にみえる。賦を買ったのは漢の武帝の正室陳皇后であり、買った賦を武帝に聞かせることで寵愛を取り戻すことができたというのである。ところが、この「白頭吟」は司馬相如が妾を取ろうとした時に、その妻卓文君が「白頭吟」を作って絶縁しようとし、司馬相如は妾を取することを止めたという故事に由来する楽府題である。「長門賦」を作って陳皇后の失われた寵愛を取り戻すのに一役買った司馬相如が、自身が妾を囲おうとしたところ卓文君に「白頭吟」を歌われ絶縁の意思を伝えられると

は、なんと皮肉なことだろうか。結果として、司馬相如は妾を囲うことをやめたとされるが、陳皇后の寵愛を取り戻したことも含め司馬相如はその人物伝から作品に至るまで様々な逸話に彩られているようだ。

「長門賦」は、『文選』卷十六「哀傷」に収録されており、作品の主人公である陳皇后、自分が受け容れられない痛切な悲しみを述べた作品である。司馬相如の代表作「子虚上林賦」(「天子遊獵賦」)や「美人賦」、「大人賦」は列伝に収められているが、今回考察する「長門賦」は、『史記』、『漢書』にその名はみえない⁽²⁾。

ところで、この「長門賦」には序文にあるような、陳皇后が司馬相如に賦を作らせ主上を悟らせたとという話柄が、史書に明確に記載されていないという問題がある。

本論は、この問題に関する議論もとに「長門賦」に検討

を加え、「長門賦」がもたらした文学史的展開を明らかにすることを目的とする。

それではまず、作品の主人公たる陳皇后と舞台となる長門宮についてみてゆこう。

二、陳皇后と長門宮

陳皇后は幼名を阿嬌といい、漢の武帝とはいとこ同士であったが、陳皇后の母の長公主嬪によって、武帝の最初の正室となった。この二人がいかにして出会ったかについては、『史記』や『漢書』には見えない。しかし、次に掲げる二人の出会いを述べる逸話は、広く人口に膾炙しているといつてよいだろう。

數歳、長公主嬪抱置膝上、問曰、兒欲得婦不。膠東王曰、欲得婦。長主指左右長御百餘人、皆云不用。末指其女問曰、阿嬌好不。於是乃笑對曰、好、若得阿嬌作婦、當作金屋貯之也。長主大悅、乃苦要上、遂成婚焉。數歳にして、長公主嬪抱へて膝上に置き、問ひて曰はく、兒は婦を得んと欲せざるや不^やと。膠東王（引用者注…後の漢の武帝）曰はく、婦を得んと欲す。長

主左右の長御百餘人を指すも、皆用ゐずと云ふ。末に其の女を指し問ひて曰はく、阿嬌は好きや不^やと。是に於て乃ち笑ひて對へて曰はく、好し、若し阿嬌を得て婦と作さば、當に金屋を作りて之を貯ふべきなりと。長主大いに悦び、乃ち苦^しりに上に要め、遂に婚を成す。（『漢武故事』）

ここに登場する長公主嬪は武帝のおばにあたり、阿嬌は長公主の娘である。武帝が皇帝に即位することができたのはこの長公主の力に拠ることが大きいと、『漢書』外戚伝は伝える。こうして二人は夫婦となり阿嬌は陳皇后となったが、二人の間には十数年のあいだ子ができなかった。そのうち、武帝の関心は後に衛皇后となる衛子夫に向かい、やがて衛子夫との間には三人の皇女が生まれた。一方の陳皇后は次第に寵愛を失つていった。やがて、陳皇后が巫蠱の呪詛を行っていると噂が立ち、元光五（前一三〇）年に武帝は大がかりな捜査を命じた。結果、楚服という巫女が巫蠱の呪いを行つてゐることが発覚した。楚服は梟首され、この他の関係者三百人あまりが連座した。陳皇后も取り調べを受け関係したことが明らかになると、皇帝は勅書を与えて長門宮に移させた。「皇后序を失ひ、巫祝に惑ひ、以

て天命を承くべからず。其れ璽綬たてまうを上り、罷退して長門宮に居れ。」⁽³⁾こうして陳皇后は皇后の位を廃せられ、十数年の後に寂しく生涯を閉じたのである。⁽⁴⁾

ところで、この長門宮は、陳皇后の母である嫫により武帝に献上された長門園が長門宮に改められたものである。献上された経緯については、『漢書』東方朔伝に詳細な記録がある。以下、概略を示すことにする。

武帝のおばであり陳皇后の母である館陶公主（嫫）は、竇太主とも呼ばれていたが、堂邑侯の陳午という男の妻になった。陳午が死んだ時、公主は五十歳あまりであったが、やがて、自分のところに入りしめていた真珠売りの母に連れられてきていた美少年の董偃とうえんを近づけて寵愛するようになった。その後、董偃は公主に引き取られ、学問や武芸を学ぶようになった。

公主の董偃に対する寵愛がますます盛んになったころ、ひそかに公主と通じていることを不安に感じていた董偃は友人の爰叔えんしゆくに相談をした。爰叔は、長門園を陛下に献上するよう公主に申し出るとよい。この提案があなたのものであることを陛下が知れば、あなたも安心だろう、と進めた。董偃は爰叔の言うとおり公主に進言し、公主も即座に武帝に長門園を献上した。武帝は非常に喜び、長門園をあらた

め長門宮としたのである。⁽⁵⁾

以上、陳皇后と長門宮がそれぞれどのようなものであるかを確認した。史書には、やはり陳皇后が再び寵愛を得たという記述は見えない。しかし、長門宮が陳皇后にとってゆかりある場所であることは指摘できよう。

三、「長門賦」への評価をめぐって

先にも述べたが、「長門賦」は『文選』に収録され多くの読者を得た。同時に、「長門賦」に対する様々な意見や議論もなされた。議論のポイントは、概ね次の三点に集約されるだろう。

一、序文に述べられた出来事が史書や同時代史料により確認できないため、司馬相如に仮託した偽作であると
とする意見。

二、序文のみが偽作であり本文は司馬相如の作であると
する意見。

三、歴史的事実が確認できないからといって、偽作であると断定することはできないとする意見。

以下、これらの議論について見てゆくことにする。「長門賦」に対する疑義について、唐以前に早くも南朝

齊の陸厥が「与沈約書」にて「長門・上林、殆非一家之賦。（長門・上林は、殆んど一家の賦に非ず。）⁽⁶⁾」と、「長門賦」と「上林賦」は同じ司馬相如の作ではないのではないかと述べている。続く唐代においては、『文選』六臣注のうち呂延濟はより明確に、「濟曰、陳皇后復得親幸。案諸史傳、並無此文。恐叙書之誤。（濟曰はく、陳皇后復た親幸せらるるを得と。諸史傳を案ずるに、並びに此の文無し。恐らくは叙書の誤ならん。）」と、史書にこの話柄が見えないことを根拠に記録上の誤りではないかと指摘している。一方、『藝文類聚』卷三五「妬」には『漢書』を引用して「漢書曰、武帝陳皇后爲妬、別在長門宮。司馬相如作賦、皇后復親幸。（漢書に曰はく、武帝陳皇后に妬まれ、別に長門宮に在り。司馬相如 賦を作り、皇后復た親幸せらる。）」とある。唐代には現在伝わる『漢書』とは違うテキストが行われている可能性もあるため、まったく序文を史実に基づくものではないとは断定できないが、序文に述べている内容が、史書に見えないことへの指摘はなされていた。

文選載、揚子雲解嘲有序、揚子雲甘泉賦有序、賈誼鵬鳥賦有序、禰正平鸚鵡賦有序、司馬長卿長門賦有序、漢武帝秋風辭有序、劉子駿移書責太常博士有序。以上

皆非序也。乃史辭也。昭明摘史辭以爲序誤也。

文選載するに、揚子雲の解嘲に序有り、揚子雲の甘泉賦に序有り、賈誼の鵬鳥賦に序有り、禰正平の鸚鵡賦に序有り、司馬長卿の長門賦に序有り、漢武帝の秋風辭に序有り、劉子駿の移書責太常博士に序有り。以上は皆序に非ざるなり。乃ち史の辭なり。昭明史の辭を摘み以て序と爲すは誤なり。 ※傍線は筆者による

（王觀國『学林』卷七「古賦序」）

続く宋代にいたると、王觀國は序文が附された作品を列挙して、これらの作品にはいずれも序文が附されているが、これらは序文ではなく、これらの作品を収録している歴史書の記述をそのまま序文にしていると指摘している。『文選』におさめられている作品で序文があるものは、実はその作品を伝える記述を『文選』の編者である昭明太子が序として仕立て上げたのだというのである。⁽⁷⁾

長門賦者、司馬相如之所作也。歸來子曰、此諷也、非高唐・洛神之比。梁蕭統文選云、漢武帝陳皇后得幸、頗如別在長門宮、聞蜀郡司馬相如天下工爲文、奉黃金百斤爲相如・文君取酒、因求解悲愁之辭。而相如爲文

以悟主上、皇后復得幸。而漢書皇后及相如傳、無奉金求賦復幸事。然此文古妙、最近楚辭。或者相如以后得罪、自爲文以諷、非后求之、不知敘者何從實此云。

長門賦は、司馬相如の作る所なり。歸來子曰はく、此れ諷なり、高唐・洛神の比に非ず。梁の蕭統の文選に云ふ、漢の武帝の陳皇后幸せらるるを得、頗る妬み別れて長門宮に在り、蜀郡の司馬相如天下に工に文を爲るを聞き、黃金百斤を奉じて相如・文君の爲めに酒を取り、因りて悲愁を解くの辭を求む。而して相如文を爲りて以て主上を悟らしめ、皇后復た幸せらるるを得たり。而れども漢書の皇后及び相如の傳に、金を奉じて賦を求め復た幸せらるるの事無し。然れども此の文古妙にして、最も楚辭に近し。或る者相如後の罪を得るを以て、自ら文を爲りて以て諷し、后の之を求むるに非ずと、敘する者何に従りて此を實とするかを知らずと云ふ。

(朱子「楚辭後語」卷二「長門賦」解題)

続けて、朱子の『楚辭後語』を見てみよう。朱子は、「長門賦」の序文にある逸話について、『漢書』等の歴史書には陳皇后が大金で司馬相如から賦を買ったという記述が無

いことを指摘する。一方で、「長門賦」本文については「此の文古妙なり」と古風な趣きがある点を評価している。つづく元の祝堯も『古賦辨體』において、『楚辭後語』の指摘を踏襲しつつ「長門賦」に用いられる表現技法を詩の六義に沿って解釈し、さらに、「長門賦」は読む人を感動させる内容を持っていると評価している。⁸⁾

古人爲賦多假設之辭、序述往事以爲點綴、不必一一符同也。子虛亡是公烏有先生之文、已肇始於相如矣。後之作者實祖此意、謝莊月賦、陳王初喪應劉、端憂多暇。又曰抽毫進牘、以命仲宣。

按王粲以建安二十一年從征吳、二十二年春道病卒。徐陳應劉一時俱逝、亦是歲也。至明帝太和六年、植封陳王。豈可倚摭史傳以議此賦之不合哉。庾信枯樹賦、既言殷仲文出爲東陽太守、乃復有桓大司馬、亦同此例(仲文爲桓玄侍中、桓大司馬則玄之父温也。此乃因仲文有此樹婆娑之言、桓元子有木猶如此之歎、遂以二事湊合成文)。而長門賦所云陳皇后復得幸者、亦本無其事。俳諧之文、不當與之莊論矣(長門賦乃後人託名之作、相如以元狩五年卒、安得言孝武皇帝哉)。陳后復幸之云、正如馬融長笛賦所謂屈平適樂國、介推還受祿也。

古人賦を爲るに假設の辭多く、往事を序述して以て點綴と爲し、必ずしも一一符同せざるなり。子虛亡是公烏有先生の文、已に相如に肇始す。後の作者實に此の意を祖とし、謝莊の月賦に、陳王初めて應劉を喪ひ、端憂して暇多しと。又曰はく毫を抽きて牘を進め、以て仲宣に命ずと。

按ずるに王粲は建安二十一年に呉に従征し、二十二年春道に病ありて卒す。徐・陳・應・劉一時に俱に逝くも、亦た是の歳なり。明帝の太和六年に至り、植陳王に封ぜらる。豈に史傳を拮據して以て此の賦の合せざるを議すべけんや。庾信の枯樹賦に、既に殷仲文出でて東陽太守と爲り、乃ち復た桓大司馬有りと云ふも、亦た此の例に同じなり（仲文 桓玄の侍中爲り、桓大司馬は則ち玄の父温なり。此れ乃ち仲文に此の樹婆娑たりの言有り、桓元子に木猶ほ此の如しの歎有るに因りて、遂に二事を以て湊合して文を成す）。而して長門賦の云ふ所の陳皇后復た幸せらるるを得るとは、亦た本其の事無し。俳諧の文、當に之と莊論すべからず（長門賦は乃ち後人の託名の作なり、相如元狩五年を以て卒し、安んぞ孝武皇帝と言ふを得んや）。陳后復た之に幸せらるると云ふは、正に馬融の長笛賦に所謂

屈平樂國に適き、介推還りて禄を受くるが如きなり。

※（ ）内は原注。また、傍線は筆者による（顧炎武『日知録』卷十九「假設之辭」）

顧炎武の『日知録』には、古人の賦には「假設の辭」が多いとし、司馬相如の「子虛上林賦」に子虚や亡是公といった架空の人物が登場すること、謝莊の「月賦」に曹植が建安七子の一人應場の死を悼み、王粲に賦を作らせるといふ構成を取ることなどを例に挙げ、『文選』に収録された作品には、架空の、あるいは歴史上の人物になぞらえて物語を構成しているものが多いことを指摘している。その上で、「長門賦」については、この作品によつて陳皇后が寵愛をとりもどしたという記録が無いこと、また、司馬相如の卒年から、「長門賦」の序文に「孝武皇帝」と記すこととはできないだろうとしている。

清の何焯は、「此文乃後人所擬、非相如作。其詞細麗、蓋平子之流也。（此の文乃ち後人の擬する所にして、相如の作に非ず。其の詞細麗にして、蓋し平子の流ならん。）」と、「長門賦」は司馬相如の名に仮託した後世の偽作であるといふこと、また、その織細で美しい言葉の使い方から後漢の張衡の流れを汲むものの作であろうとしている。

一方、同じく清の張惠言はこの何焯の指摘に対して「此文非相如不能作。或以爲平子之流、未知馬張之分也。（此の文相如に非ざれば作る能はず。或ひと以て平子の流と爲すは、未だ馬・張の分を知らざるなり。」¹⁰）、むしろ司馬相如で無ければこの「長門賦」は作れないだろう。これを張衡の流れとみなすのは、彼らの作風の違いをわかっているのだという意見を呈している。

以上の議論をまとめると、「長門賦」を司馬相如の作とすることへの疑義を呈する意見が多く見られる。その大きな理由としては、やはり序文に述べられる陳皇后が司馬相如の賦を買ったとする話柄が、他の文献にはほとんどみられないことがあげられよう。『藝文類聚』引『漢書』のテキストに関する問題は残るが、歴史を通じて「長門賦」の序文が疑義をもつて受け止められていたことは間違いない。さらに後世になると、顧炎武は古人の賦に「仮説の辞」すなわち虚構の表現を用いた作品が多く見られることを挙げ、その虚構の表現がまさに司馬相如からはじまっているとし、その上で、「長門賦」は後世の人が司馬相如に仮託した作品であろうと指摘する。さらに何焯は作風に注目してその「後人」を後漢の張衡の風格を受け継ぐ者であろうとしている。一方、同じく作風に注目した張惠言は、むし

ろその風格から司馬相如の作であると主張する。このような賦に関する議論の中に、賦の作風の違いに着目した内容が見られることは、賦の読まれ方の一面が見え興味深い。

賦の序文については、谷口洋氏によってつとに指摘されるように、歌や賦が史書に述べられる際、その舞台として機能する話柄が展開されることが多い¹¹。司馬相如についても、本人の列伝がまさに様々な逸話によって彩られて記述されている¹²。こういった、歴史上の人物に仮託した作品は、例えば李陵と蘇武の贈答詩などの類例もあげられよう。作者と作品が関係性をもつて後世に読まれるということとは、漢代の文学にはしばしば見られるようである。

それでは続いて、「長門賦」本文を見てみることにしよう。

四、「長門賦」について

「長門賦」は、その序文が七三字、本文が六三三字とさほど大部な作品ではない。序文についてはすでに触れたが、あらためて内容を確認しよう。「孝武皇帝の陳皇后、時に幸を得るも、頗る妬む^た。別に長門宮に在りて、愁悶悲思す。」と、嫉妬により長門宮に幽閉されたところから「長門賦」の舞台ははじまる。嫉妬のために幽閉され、いかんともし

がたい思いを抱えた陳皇后は、司馬相如が文章を作るのに巧みであるということ聞きつけ、司馬相如とその妻卓文君のために大金で酒を買い取つてやる。そのかわりとして、己の悲しみを解きほぐす辭賦を書くように依頼した。司馬相如たちのために酒を買うことにしたのは、二人の次のような事情による。

司馬相如は卓文君と駆け落ちしたために貧乏暮らしをしていた。そこで卓文君が一計を案じ、居酒屋を営むことで生計を立てることにしたのである。陳皇后は、この司馬相如たちが経営する居酒屋の酒を買い、二人を援助してやつたというわけだ。生計のために司馬相如が居酒屋を営んだということは、『史記』の司馬相如列伝に見えるが、この序に見えるような、陳皇后が司馬相如に作品を依頼したということは司馬相如列伝には見えない。このように、この序文は『史記』に見える記述と虚構性のある逸話を織り交ぜられている。そのため、この陳皇后の「買賦」と司馬相如の「長門賦」製作の関係性が、作品を読むものに真実味をおびて伝えられるのではないだろうか。

夫何一佳人兮、步逍遙以自虞。魂踰佚而不反兮、形枯槁而獨居。言我朝往而暮來兮、飲食樂而忘人。心慊移

而不省故兮、交得意而相親。伊予志之慢愚兮、懷貞慙之懼心。願賜問而自進兮、得尚君之玉音。夫れ何ぞ一佳人、歩いて逍遙して以て自ら虞る。魂は踰佚して反らず、形は枯槁して獨居す。言ふ我れ朝に往きて暮に來たらんと、飲食して樂しみて人を忘る。心慊移して故きを省みず、交も意を得て相親しむ。伊れ予が志の慢愚なる、貞慙の懼心を懷く。願はくは問を賜はりて自ら進み、君の玉音を尚ぐるを得んと。

「長門賦」は一人の美人が呆然とした様子でさまよい歩く姿からはじまる。なぜさまよい歩いているかというところ、天子が自分の所に訪れると語つて聞かせてくれたのに、天子は新しい美人―衛夫人―と飲食を樂しみ、自分のことを忘れてしまつてゐるからである。ここには、訪れるという約束を反故にされた女性の悲しみが表れている。天子の心変わりの早さと自分の頑なに待ち続ける姿勢を對比させ、待ち人の來ないさみしさを冒頭から述べてゐる。

奉虛言而望誠兮、期城南之離宮。脩薄具而自設兮、君曾不肯乎幸臨。廓獨潛而專精兮、天漂漂而疾風。登蘭臺而遙望兮、神怳怳而外淫。浮雲鬱而四塞兮、天窈窈

而晝陰。雷殷殷而響起兮、聲象君之車音。飄風迴而起
闔兮、舉帷幄之檐檐。桂樹交而相紛兮、芳酷烈之閭闈。
孔雀集而相存兮、玄猿嘯而長吟。翡翠翮翼而來萃兮、
鸞鳳翔而北南。

虚言を奉じて誠を望み、城南の離宮に期す。薄具を脩
めて自ら設くるも、君は曾て幸臨するを肯んぜず。廓
として獨り潜れて精を専らにせば、天漂漂として疾風
あり。蘭臺に登りて遙かに望めば、神怗怗として外
に淫ぶ。浮雲鬱として四に塞がり、天竊窈として晝陰
し。雷殷殷として響き起り、聲は君の車音に象たり。
飄風迴りて閭に起こり、帷幄を舉げて檐檐たり。桂樹
交はりて相紛れ、芳は酷烈にして閭闈たり。孔雀集ま
りて相存ひ、玄猿嘯きて長吟す。翡翠翼を脅めて來
り萃まり、鸞鳳翔けて北南す。

前段で新しい女性と飲食を楽しんでいるのを受けて、自
分も食事を用意して待っていたのにと恨めしい気持ちさを
らげだす。薄情な男とそれを待つけなげな女という構図で
ある。結局待ち人は来ず、女は動揺する心を静めようとす
る。すると、鋭敏になった感覚か、天空を吹き抜ける風の
音や雲の浮かぶ様子に意識を向けさせる。とどろく雷の音

や、つむじ風が誘い込む桂の香りが、待ち焦がれる男が訪
れたのかと期待させる。そこに孔雀たちが慰めるように集
まり、猿が悲しげに鳴く。来ぬ人を待つ女の悲しみを自然
や動物の描写により象徴させているのである。さらに、「鸞
鳳翔けて北南す。」と、鸞鳥と鳳凰という皇帝と皇后を象
徴する鳥が、北と南に分かれて飛ぶ様子は、まさに禁中と
長門宮の位置関係をも示していると考えられるだろう。

心憑噫而不舒兮、邪氣壯而攻中。下蘭臺而周覽兮、步
從容於深宮。正殿塊以造天兮、鬱並起而穹崇。間徙倚
於東廂兮、觀夫靡靡而無窮。擠玉戸以撼金鋪兮、聲噲
呬而似鍾音。刻木蘭以爲榱兮、飾文杏以爲梁。羅丰茸
之遊樹兮、離樓梧而相撐。施瑰木之構榱兮、委參差以
榱梁。時仿佛以物類兮、象積石之將將。

五色炫以相曜兮、爛耀耀而成光。綴錯石之瓊甍兮、象
璚瑁之文章。張羅綺之幔帷兮、垂楚組之連綱。撫柱栢
以從容兮、覽曲臺之央央。白鶴噉以哀號兮、孤雌跼於
枯楊。

心は憑噫して舒びず、邪氣は壯にして中を攻む。蘭臺
を下りて周覽し、歩して深宮に從容す。正殿塊とし
て以て天に造り、鬱として並び起りて穹崇たり。間く

東廂に徒倚し、夫の靡靡として窮まり無きを觀る。玉戸を擠して以て金鋪を撼せば、聲は噌吰として鍾音に似たり。木蘭を刻んで以て椽と爲し、文杏を飾りて以て梁と爲す。丰茸の遊樹を羅ね、離樓として梧へて相撐ふ。瑰木の構榼を施し、委すること參差として以て椽梁あり。時に仿佛として以て物類あり、積石の將將たるに象たり。

五色炫として以て相曜し、爛耀耀として光を成す。錯石の瓠髀を緻かにし、瑇瑁の文章に象たり。羅綺の幔帷を張り、楚組の連綱を垂る。柱楣を撫して以て從容し、曲臺の中央たるを覽る。白鶴噉きて以て哀號し、孤雌枯楊に跼てり。

思いの晴れぬ女は、長門宮をさまよう。長門宮のかまへは非常に豪奢で、天まで届くばかりにそびえる正殿や、それを支える大きな柱がまず目に入る。さらにどこまでも続く建物には美しく裝飾された柱や梁がならんでいる。玉で裝飾された扉や金の釘隠しなど、豪奢な建築の描写は非常に細かい。

さらに、色とりどりの綾絹、瑇瑁という亀の甲羅のように鮮やかな模様に敷き詰められた玉砂利など、長門宮とそ

の周辺の豪奢な様子を描き出す。

つづけて、白い鶴や連れあいのいない鳥が女の孤独を象徴する形で登場する。建築物が色とりどりで大きく豪華であればあるほど、その巨大な空間に鳥が一羽だけという対比が孤独感をさらに強調する。

日黄昏而望絶兮、悵獨託於空堂。懸明月以自照兮、徂清夜於洞房。援雅琴以變調兮、奏愁思之不可長。案流徵以却轉兮、聲幼妙而復揚。貫歷覽其中操兮、意慷慨而自印。左右悲而垂淚兮、涕流離而從橫。

日黄昏にして望みは絶え、悵として獨り空堂に託く。明月懸かりて以て自ら照らし、清夜に洞房に徂く。雅琴を援きて以て調べを變え、愁思の長くすべからざるを奏す。流徵を案じて以て却て轉ずれば、聲幼妙として復た揚がる。貫きて歴覽するに其れ中操なり、意は慷慨として自ら印がる。左右悲しみて涙を垂れ、涕は流離して從横す。

やがて日も暮れ、どんなに待っても男は来ない。夜になって一人でいる寂しい部屋を月が照らす。琴をひけば悲しみの音色が広がる。悲しみを静めようとしても、琴の音色が

むしろ悲しみをかき立てる。

「長門賦」の悲哀の描写は、空間描写から始まり時間の描写に移行する。作品に即してみれば、長門宮の正殿からはじまり、宮殿の建物の中から細かく描き上げ戸外へと視点を移す。中心から周辺へと視点を移動させる表現方法は、漢賦の典型的な描出の手法といつて良いだろう。⁽¹⁵⁾

舒息悒而增欷兮、蹠履起而彷徨。揄長袂以自翳兮、數昔日之僂殃。無面目之可顯兮、遂頽思而就牀。搏芬若以爲枕兮、席荃蘭而蒞香。忽寢寐而夢想兮、魄若君之在旁。惕寤覺而無見兮、魂迂迂若存亡。

息悒を舒べて欷を増し、蹠履して起ちて彷徨す。長袂を揄ひて以て自ら翳し、昔日の僂殃を數ふ。面目の顯はすべき無く、遂に思ひを頽きて牀に就く。芬若を搏りて以て枕と爲し、荃蘭を席きて蒞香あり。忽ち寢寐して夢想し、魄は君の旁に在るが若し。惕きて寤覺むれば見るもの無く、魂迂迂として亡へるもの有るが若し。

悲しみは薄らぐことはなく、女はかつての己の行いを後悔する。自身を責めながらも寢床につくと、夢に待ちわび

た男に出会う。しかし、出会ったかと思えばやはりそれは夢での出来事であり、夢から覚めた女は呆然としてしまふ。会いたいと強く願うあまり夢に見るといふ、女の悲しみと男を思慕する思いを痛烈に描き出している。

衆雞鳴而愁予兮、起視月之精光。觀衆星之行列兮、畢昂出於東方。望中庭之藹藹兮、若季秋之降霜。夜曼曼其若歲兮、懷鬱鬱其不可再更。澹偃蹇而待曙兮、荒亭亭而復明。妾人竊自悲兮、究年歲而不敢忘。

衆鳴きて予を愁へ、起ちて月の精光を視る。衆星の行列を觀れば、畢と昂とは東方に出づ。中庭の藹藹たるを望めば、季秋の降霜の若し。夜曼曼として其れ歳の若く、懷ひ鬱鬱として其れ再び更ふべからず。澹かに偃蹇して曙を待てば、荒亭亭として復た明けんとす。妾人は竊かに自らを悲しみ、年歳を究むれども敢へて忘れず。

鶏たちが鳴き、やがて夜が明ける。夜明けが悲しいのは夢の中の逢瀬を惜しんでのことか、男を待つ一日がまた始まることのつらさを思つてのことか。しかし、待つ女にとつては明け方の景色をみるにつけ、一日が一年のように感じ

られる。

作品全体の描写の中に時間の経過が織り交ぜられているのは、主人公たる女の待ち焦がれる様子を克明に描こうとするからである。漢賦は、その事物の列挙という表現方法の特徴を、空間描写の面から指摘されることが常であるが、つぶさに見れば空間描写のみならず時間の経過も多く描き込まれていることに気づかされる。「妾人は竊かに自らを悲しみ、年歳を究むれども敢へて忘れず。」は、まさに陳皇后の悲しみと寂しさから出た悲痛な叫びであろう。

以上のように「長門賦」をみてみると、全体を通じては楚辞を淵源にもつ賢人失志型の様式をそなえており、作品の構成としては漢賦の典型を祖述しているという特徴がある。また、人物名を直接述べてはいないが、女性の悲哀の描写や長門宮などの情景から、この作品の登場人物に陳皇后を想起することも可能であろう。しかし、本文からは武帝の寵愛を取り戻せたかを知ることができない。この点から、「長門賦」の序文は、他の賦につけられた序文と比較しても異質であるといえる。

すなわち、漢賦をはじめとする賦の序文は、その賦の背景となる舞台を用意する内容や、作者の思いを述べることが常である。ところが、この「長門賦」の序文は、賦を作

ることになった経緯のみならず、賦が読まれた結果―陳皇后が武帝の寵愛を取り戻したこと―まで述べているのである。これは非常に珍しい例であり、やはりこの点からも司馬相如の作とするのは難しいと判断せざるを得ないだろう。

しかし、同時にこの叙述こそが、後世の作品に非常に大きな影響を与えたとも考えられる。序文に述べられたような、作品の主人公が無事に寵愛を取り戻せたという結末も含めて、「長門賦」は受容されたのである。

漢賦には、他にも武帝の「李婦人賦」や班婕妤の「自悼賦」など、愛する者との別れや寵愛を失った悲痛を歌った作品も見られる。これも楚辞の系譜にたつらなる賢人失志型の賦とみることができ、漢賦のもう一つのテーマとしてこのような「哀傷」を挙げることもできるであろう。しかし、作品の真偽はさておきこれらの作品と「長門賦」との違いは、賦によって寵愛を取り戻せたという大団円で結ばれる物語が「長門賦」にあることである。これが、「長門賦」が持つ最も大きな特徴であり、それこそが、後世の文人たちの関心を惹いたと考えることはできないだろうか。

五、後世への展開について

後世の文学に目を向ければ、「長門賦」の話柄そのものをテーマとした作品も、後世に見られるようになってくる。その一例として「長門賦」から発生した楽府題である「長門怨」についても触れておきたい。

「長門怨」は『樂府詩集』卷四十二につきのようにある。

長門怨。梁・柳惲 漢武帝故事曰、武帝爲膠東王時、長公主嫖有女。欲與王婚、景帝未許。後長主還宮、膠東王數歲、長主抱置膝上、問曰、兒欲得婦否。長主指左右長御百餘人、皆云不用。指其女問曰、阿嬌好否。笑對曰、好。若得阿嬌作婦、當作金屋貯之。長主乃苦要帝、遂成婚焉。

漢書曰、孝武陳皇后、長公主嫖女也。擅寵驕貴、十餘年而無子、聞衛子夫得幸、幾死者數焉。元光五年廢居長門宮。

樂府解題曰、長門怨者、爲陳皇后作也。后退居長門宮、愁悶悲思、聞司馬相如工文章、奉黃金百斤、令爲解愁之辭。相如爲作長門賦、帝見而傷之、復得親幸。後人因其賦而爲長門怨也。

長門怨。梁・柳惲 漢武帝故事に曰はく、武帝膠東王

爲りし時、長公主嫖に女有り。王と婚せんと欲するも、景帝未だ許さず。後長主宮に還り、膠東王數歲にして、長主膝上に抱置して、問ひて曰はく、兒は婦を欲するや否やと。長主左右の長御百餘人を指さすも、皆用らずと云ふ。其の女を指さして問ひて曰はく、阿嬌は好きや否やと。笑ひて對へて曰はく、好し。若し阿嬌を得て婦と作せば、當に金屋を作りて之を貯ふべしと。長主乃ち苦りに帝に要め、遂に婚を成す。

漢書に曰はく、孝武陳皇后は、長公主嫖の女なり。寵を擅にして貴に驕り、十餘年にして子無く、衛子夫の幸せらるるを得るを聞くや、幾んど死せんとすること數しばなり。元光五年廢せられて長門宮に居す。

樂府解題に曰はく、長門怨は、陳皇后の作と爲すなり。后退きて長門宮に居し、愁悶悲思し、司馬相如の文章に工みなるを聞き、黃金百斤を奉じて、解愁の辭を爲らしむ。相如爲めに長門賦を作り、帝見て之を傷み、復た親幸せらるるを得。後人其の賦に因りて長門怨と爲すなり。

玉壺夜愔愔

玉壺夜愔愔

應門重且深

應門重なり且つ深し

秋風動桂樹

秋風桂樹を動かし

流月搖輕陰

流月 輕陰を搖がす

綺簷清露溼

綺簷きえん 清露せいろう溼やかに

網戸思蟲吟

網戸 思蟲吟しむぎんず

歎息下蘭閣

歎息して蘭閣らんかくを下り

含愁奏雅琴

愁へを含んで雅琴を奏す

何由鳴曉佩

何に由りてか曉佩きょうはいを鳴らし

復得抱宵衾

復た宵衾を抱くことを得ん

無復金屋念

復た金屋の念無し

豈照長門心

豈に長門の心を照らさんや

樂府の解題を見れば、あきらかに「長門賦」の序文を踏まえていることが看取できる。また、柳惲の作品もやはり「長門賦」本文の内容を踏まえた、男を待つ女の悲哀を歌い上げている。ここからも、「長門賦」がジャンルの枠を超えたテーマとして展開している現れを見ることができよう。

この他、ジャンルを賦に立ち戻らせれば、唐代の黃滔に「陳皇后因賦復寵賦（陳皇后 賦に因りて復た寵せらるの賦）」がある。内容は、陳皇后のなげきだけではなく、司馬相如の作品の素晴らしさをたたえている。賦題に「因賦」とあることから、むしろ「長門賦」そのものについて述べ

ようとした作品であるとも見ることもできるかもしれない。「長門賦」は、このように賦というジャンルにとどまらず作品のテーマが様々な形で展開した、その基盤となる作品だといえるだろう。

六、おわりに

歴史上の人物の存在・非存在については、様々な議論があるだろう。司馬相如の伝記に関しても、彼の存在そのものを疑うことはしないとしても、その伝記に付随してたくさん逸話が残されている。これらをすべて歴史的事実の記録であると思わずするのは難しい。

そこで、現在のところは次のように考えたい。前漢の時代に、司馬相如という辞賦によつて身を立てた一個人人間が存在した。そして、彼の作品とされるもののいくつかは偽作であったとしても、辞賦を作り皇帝に読ませることを仕事としていた人物であり、後世までその作品のいくつかは残った。やがて、司馬相如を思慕する者たちが、「司馬相如」という一個人の人間に対して、様々に逸話を作り上げ、それが一つには「長門賦」の序文という形にまとめられたのである。

同様の展開を「白頭吟」にも見る事ができるのでないだろうか。「白頭吟」という夫に捨てられようとする女の嘆きをテーマとする楽府がやがて広く行われるにつれ、卓文君という父の反対を押し切り司馬相如のもとに駆け落ちした一人の女性が、作品の主人公に選ばれた。司馬相如が妾を置こうとしたときに卓文君がそれを諫めるために作ったという、「白頭吟」が作られた経緯を述べる話柄は、このような司馬相如と卓文君との恋愛物語を前提として置かれなければ成り立たないものである。ここにも、司馬相如という文人の伝記から様々に派生して語られてゆく文学の展開を見てゆくことができるだろう。司馬相如は作品とともに彼の事跡そのものが様々な逸話を生み、それによって語りつがれ、後世の文学の題材そのものとして展開していったのである。

注

(1) 「相如去蜀謁武帝、赤車駟馬生輝光。一朝再覽大人作、萬乘忽欲凌雲翔。問道阿嬌失恩寵、千金買賦要君王。相如不憶貧賤日、官高金多聘私室。(相如蜀を去りて武帝に謁し、赤車駟馬輝光を生ず。一朝再び覽る大人の作、萬乘忽ち雲を凌いで翔けんと欲す。問道らく阿嬌恩寵を失ふと、千金もて賦を買ひ君王に要

む。相如貧賤の日を憶えず、官高く金多く私室を聘す。)(「樂府詩集」卷四二)。

(2) 林香奈氏は、「愁いと賦」(京都府立大学学術報告「人文」第六十九号、二〇一七年)にて、次のように指摘している。

「愁思」という言葉そのものは、もともと宋玉の「高唐賦」に「長史官を驟^すて、賢士志を失い、愁思して已むこと無く、歎息して涙を垂る」と見える。また後漢の王逸「楚辞章句」
「天問章句」の序にも「仰ぎて凶画を見、因りて其の壁に書すに、何とがめて之を問わば、以て憤懣を深もらし、愁思を舒瀉す」とある。前者は高唐の景観による人の変化をいう箇所だが、「失志」の直後に「愁思」の語が見え、その意味では王逸の序にいう屈原の境遇にも通じるところがあり、「愁思」と「失志」は結びつきやすい言葉であったということが言える。

それが先に見てきたような女性の愁いを表す言葉に変化していくきっかけは、司馬相如の「長門の賦」であるといつてよいであろう。「長門の賦」は周知のとおり、漢の武帝の寵愛を失った陳皇后が長門宮で過ごす様子を描いたものである。まずその序には「孝武皇帝の陳皇后、時に幸を得るも頗る妬なり。別れて長門宮に在り、愁悶悲思す」とあり、賦の本文には「日は黄昏にして望み絶え、悵として独り空

堂に託す。明月を懸けて以て自ら照らし、清夜を洞房に徂る。

雅琴を援きて以て調を変え、愁思の長くすべからざるを奏す」とある。司馬相如の名とともに寵愛を失つた女性の「愁思」するさまは広く浸透していったものと思われる。

(3) 『漢書』外戚伝

(4) 漢の武帝と陳皇后については、吉川幸次郎『漢の武帝』（岩波新書一九四九年初版、一九六三年改版）「第一章 阿嬌」を参照した。

(5) 『漢書』東方朔傳

(6) 『南齊書』陸厥伝

(7) 賦と序文との関係については、谷口洋「賦に自序をつけること」

(『東方学』第百十九輯 二〇一〇年) に考察がある。

(8) 祝堯「古賦辨體」卷三に以下のようにある。「以賦體而雜出於風・比・興之義、其情思纏綿、敢言而不敢怨者、風之義。篇中如「天飄飄而疾風」、及「孤雌峙於枯楊」之類者、比之義、「上闌臺、遙望周步、援琴變調、視月精光」等語、興之義。蓋六藝中惟風・興二義每發於情、最爲動人、而能發人之才思。長卿之賦甚多、而此篇最傑出者、有風・興之義也。故晦翁稱此文古妙、歸來子亦曰、此諷也、非高唐・洛神之比。愚嘗以長卿之子虛・上林較之長門、如出二手、二賦尚辭、極其靡麗、而不本於情、終無深意遠味。長門尚意、感動人心、所謂情動於中而形於言、

雖不尚辭而辭亦在意之中。由此觀之、賦家果可徒尚辭而不尚意乎。

尚意則古之六義可兼、是所謂詩人之賦、而非後世詞人之賦矣。(賦體を以てして風・比・興の義より雜出し、其の情思纏綿として、敢へて言ふも敢へて怨みざるは、風義なり。篇中の「天飄飄として疾風あり」、及び「孤雌枯楊に峙てり」の類は、比の義なり、「闌臺を上下す、遙かに望み周歩す、琴を援き調べを變ふ、月の精光を視る」等の語は、興の義なり。蓋し六藝中に風・興の二義を惟ひ毎に情に發し、最も人を動かして、能く人の才思を發すと爲すなり。長卿の賦甚だ多きも、此の篇最も傑出する者に於て、風・興の義有るなり。故に晦翁稱すらく此の文古妙なり、歸來子も亦た曰はく、此れ諷なり、高唐・洛神の比に非ずと。愚嘗て長卿の子虛・上林を以て之を長門に較ぶるに、二手に出づるが如し、二賦は辭を尚び、其の靡麗を極めて、情に本づかず、終に深意遠味無し。長門は意を尚び、人心を感動せしめ、所謂情中に動きて言に形はるるにして、辭を尚ばずと雖も而れども辭も亦た意の中に在り。此に由り之を觀れば、賦家果して徒だ辭を尚びて意を尚ばずとすべきか。意を尚べば則ち古の六義兼ねべく、是れ所謂詩人の賦にして、後世の詞人の賦に非ざるなり。

(9) 『義門讀書記』卷四五

(10) 張惠言「七十家賦鈔」卷二。また、張惠言「七十家賦鈔」に

ついでに、拙論「張惠言の『七十家賦鈔』について」(『國學院雜誌』一一七卷一一号、二〇一六年)を参照されたい。

(11) 谷口洋氏は前掲注7に掲出した論文にて次のように述べる。

「結局司馬相如の作品も、いったん宮廷を離れると、彼をめぐる伝説の中で伝えられるようになる。もっともそれは、相如の望み通りのものであったわけではない。相如の伝記は、西南夷との通交や武帝への諫言など「客」としての活動を伝え、「天子游獵賦」「大人賦」などの作品も、その一環としてふられる。一方、卓文君との駆け落ちの末、卓王孫の財産を手に入れるなど、「客」としての生き方とは関係ない内容をも含み、消渴の持病のため政治には深入りしなかったという記述さえある。どうやら相如はその才能のおかげで、女も財産も皇帝の寵愛も、欲しいものはすべて手に入れて気楽に過ごした男として語られていたふしがある。のちの『西京雜記』には、相如の賦に関する逸話がいくつかあるし、『文選』に相如の作として収める「長門賦」には、陳皇后が相如に金を賜って賦を作ってもらったおかげで帝の寵愛を取り戻したという、史実に合わない序がついている。「長門賦」の真偽はともかく、相如の文学の語られ方には、こうした小説的な話柄を生むような素地がもともと存していたようだ。」

(12) 谷口洋「『史記』司馬相如列伝の一面―同時代人は相如をどう語ったか」(『叙説』(奈良女子大学日本アジア言語文化学会)第

四一号、二〇一四年)に「史記」司馬相如列伝の物語性について指摘がある。

(13) 「長門賦」の序文は以下の通り。「孝武皇帝陳皇后時得幸、頗妒。別在長門宮、愁悶悲思。聞蜀郡成都司馬相如天下工爲文、奉黃金百斤爲相如文君取酒、因于解悲愁之辭。而相如爲文以悟主上、陳皇后復得親幸。其辭曰、(孝武皇帝の陳皇后、時に幸を得るも、頗る妒む。別に長門宮に在りて、愁悶悲思す。蜀郡成都の司馬相如天下に工に文を爲るを聞き、黃金百斤を奉じて相如と文君の爲めに酒を取り、因りて悲愁を解くの辭を予らしむ。而して相如文を爲りて以て主上を悟らしめ、陳皇后復た親幸せらるるを得たり。其の辭に曰はく、)」

(14) 漢賦に見える芳香表現については狩野雄「香りの詩学―三国西晋詩の芳香表現」(知泉書院二〇二一年)中「第一部 香る女性像の系譜、第一章 香りを含む女たち(一)―先秦から後漢の詩歌辭賦作品」に考察がある。

(15) 例えば班固の「兩都賦」や張衡の「二京賦」などは宮殿から園林へと、描写が中央から周辺に向かう手法を採用している。

(16) これについては方蘊華著・鈴木崇義訳「漢大賦に見える漢代長安の社会風俗と都市精神」(矢野建一・李浩編『長安都市文化と朝鮮・日本』汲古書院 二〇〇七年)に指摘がある。

(17) (唐)黄滔「陳皇后因賦復寵賦」(『全唐文』卷八二二)。黄滔、

字は文江。泉州莆田（今福建省莆田縣）の人。晩唐から五代にかけての人。賦の本文は以下の通り。

がある。

〔キーワード〕漢賦、「長門賦」、司馬相如、陳皇后、漢の武帝

陳皇后一鎖長門、蕭條渥恩。欲寫退宮之永恨、因求體物之嘉言。蜀郡才高、述遺芳於桃李。漢皇心感、歸舊職於蘋蘩。

想夫跡墜城南、寵移天顧。難期獻爾於春晝、不忍解簪於日暮。

瓊樓寂寂、空高於明月秋風。瑤草萋萋、莫輒於金輿玉輅。

於此著憤、夫何釋情。犀浦有多才之著、上林推獨步之名。沽酒而居、每樂當壚之事。量金以至、爰流擲地之聲。

於是摘妍辭、貌濃黛。侔錦字、陳綺態。鬱芬馥於菑席、悄丁當於珠佩。鶴巢入構、翻成別鶴之悲。馬首虛瞻、不識牽牛之會。

振動文苑、旋彰國朝。既切採靡於藻麗、遂牽連理於桃夭。一旦

惻聖鑿、錫嘉昭。已無為雨之期、空懸夢寐。終自凌雲之製、能致煙霄。

莫不傾北園、駭南國。絲蘿而昨日靡託、珠翠而今朝改色。玉臺有恨、舞鸞之影孤來。金闕無恩、吐鳳之才續得。

設使幸望顯若、含情默然。擢髮同論於漢殿、揮毫莫構於巴川。則此日前魚、定作小鱗而赴海。寧令破鏡、卻成圓月以昇天。

懿夫揆天之手雖奇、麗水之珍可博。苟非茲賦之讚詠、奚救當時之黜削。方今妃后悉承歡、不是後賢無此作。

(18) この他に、『太平廣記』にも卷十八「神仙十八」に「柳歸舜」という作品が収録され、作品中に「長門賦」に触れている場面